○○×道徳シリーズ

～道徳の授業に新しい風を～

「情報モラル×道徳」教育

指導のポイント!

敬愛大学准教授
阿部 学

情報社会のリアリティを追う

かつて，次のような教材がありました（※1）。主人公の友人が開設したネット掲示板に，匿名の誹謗中傷コメントが書き込まれ，炎上してしまう状況を描いたものです。友人を救いたいと思っていた主人公は，実名を記しながら，誹謗中傷はやめようと真摯に訴えるコメントを掲示板に書き込みます。指導マニュアルでは，主人公の行動は勇気や正義感にもとづく「理想的な行動」と位置づけられています。

はたしてそうでしょうか。一般的に，炎上している掲示板に一人でコメントをしても問題が解決することはなく，むしろ火に油を注ぐことになってしまいます。救いたかったはずの友人が，さらに追い詰められることになるかもしれません。実名を出しているため，主人公にも害が及ぶかもしれません。そもそもネットでの誹謗中傷への対策は，大人社会においても深刻な課題となっています。情報社会のセオリーからすると，決して推奨できる行動ではなかったと言えるのではないでしょうか。

おそらく，指導マニュアルで想定されているのは，対面コミュニケーションのセオリーなのだと思います。友人を救うために立ち上がるということは，ネットや匿名性とは関係ない対面の場であれば，望ましい行動として捉えられる可能性もあります。作者がこの教材で描きたかった本質はそちらにあり，ネット掲示板や炎上という事態は些末なものであったのでしょう。

しかし，扱われるメディアのあり方によって，私たちの行動の意味は大きく変わりうるものです。友人を救いたいと願うこと自体は決して否定されるものではありませんが，その考えにもとづくふるまいが，「情報社会で適正な活動を行うための基になる考え方と態度」（※2）に合致しないこともあります。こうしたズレを放置したまま授業を続けていては，いつの日か，子どもたちを傷つけてしまうことになるかもしれません。

ズレを回避するためには，何よりも「情報社会のことをよく知る」ことが重要です。ものすごく普通なことを言ったなと思われるかもしれませんが，案外いろいろなところに落とし穴はあるものです。例えば，「ゲームをやりすぎないように」と言うときに，昔の家庭用ゲーム機を想定するのと，流行りのFPSゲーム（※3）を想定するのとでは，まったく話が変わってきます。子どもへ向けた言葉が，空虚なスローガンになってはいないでしょうか。

情報モラル教育においては，細かな指導言などを検討するより先に，まずは土台（＝情報社会についての適切な理解）をしっかり固めておくことが，授業者としての重要な責務となります。

高度化・潜在化するコミュニケーション

情報社会は変化が激しく，子どもたちの状況も2年ほどで大きく変わります。土台改修の参考となるかどうか，最近の状況で気になることを1つ挙げてみましょう。

LINEには，「ステメ」（ステータスメッセージ）という，自分のプロフィール欄にテキストを表示させられる機能があります。子どもたちは「ステメ」に，ポエムやその時々の感情など，様々な表現を記しています。

気になるのは，この「ステメ」を巧みに使って，人への悪口を書いている事例が散見されることです。たいていの場合，悪口の対象者が明示されないまま，それでも読む人が読めば分かるという書きぶりになっています。何度も改行がなされ，わざわざ下の方まで読まないと真意が分からないような巧妙なものもあります。したがって，何かを訴えられたとしても，悪口を書いた側は「自分のスペースで独り言を言っただけ」「おまえのことを書いたんじゃない」などと弁解ができてしまいます。

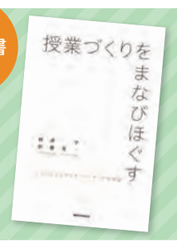
近年，LINEでのトラブルとして注目されてきたものには，「メッセージのすれ違い」「グループ外し」などがありました。もしかしたら，そうした問題は「新しい問題」としてやっと浸透したところかもしれません。ところが，現実には子どもたちのコミュニケーションはさらに高度化・潜在化しており，大人からはより一層「分かりづらい」「見えづらい」ものとなっています。こうした状況をふまえ，うまく土台をつくり直していかなければなりません。

◀LINEのステータス
メッセージ

プロフィール欄に，テキストを記すこともできる。

参考図書

阿部学・伊藤晃一　著
『授業づくりをまなびほぐす
～ここからはじめる
クリエイティブ授業論～』
（静岡学術出版）



授業者ではなく，記者になる

悩ましいのは，新たな問題に対して教材が追いついていないケースも少なくないことです。子どもたちの実態によっては「何でグループ外しみたいなありがちな話を取り上げるの？」と思われることがあるかもしれません。変化の激しい中にある情報モラル教育の宿命と言えるでしょう。

では，どうすればよいか。一つの作戦は，「子どもの実態を取材する」ような感覚で授業に臨むことです。先に，「教師が情報社会の特性をよく知っておくべき」とは言いましたが，子どもたちの状況については，当の子どもたちの方がよく知っているはずです。目の前の子どもにとって教材にリアリティがないのであれば，「教材と実態にどんなズレがある？」「実際のところを教えて」と，記者感覚で素朴に問うてみればよいのだと思います。小さな「専門家」からは，きっとたくさんのご意見を頂戴することができるでしょう。「ステメ」の問題についても，子どもたちなりに思うところがあるはずです。

「教師として教える」のではなく「記者として聞く」という作戦の採用を検討してみてほしいです。

記者感覚で子どもの意見を引き出す

情報モラル教育に臨む考え方のヒント

教師モデル	記者モデル
▶教える ▶答えは自分に ▶教材で教える	▶聞く ▶答えは子どもに ▶教材から話をふくらます

改めて，「不易と流行」について考える

情報モラル教育では「不易と流行」という言葉がよく使われます。双方を大切にしようということなのですが，実際は「不易」の重要性を強調する際に使われることが多いように思われます。

他方で，「流行」を追うことは，一般に思われるほど簡単なことではありません。今回考えてみたように，ネットやLINEを題材にさえすれば，「流行」を追ったことになる訳ではありません。遠回りになると思われるかもしれませんが，情報モラル教育の授業づくりは，情報社会やメディアの特性を丁寧に読み解くことから始まります。まずはそこに，心を燃やしてみてほしいです。

情報社会についての理解を固めた上で，指導方法を検討しよう！

※1　詳しくは参考図書にて論じています。
※2　小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　特別の教科　道徳編
※3　First Person Shooterゲーム　1人称視点のシューティングゲームの略。